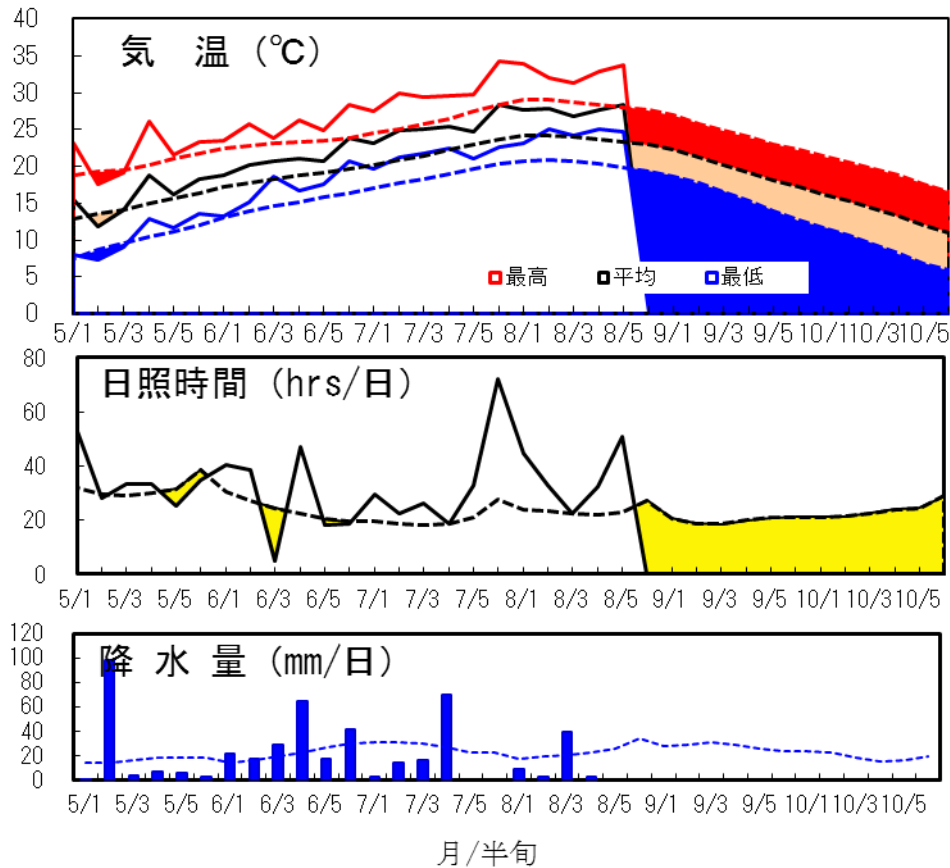


～6～7月の高温で開花早まる 生育量は平年を上回る～

～害虫の発生が多い傾向 病害との同時防除が有効～

## 1 気象経過



### ◆8/24 発表 東北地方の1か月予報(8/26～9/25までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わる。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込み。
- ・向こう1か月の気温は、高い確率80%、平年並み若しくは低い確率10%。
- ・降水量は、多い確率40%、平年並み若しくは少ない確率30%。
- ・日照時間は、少ない確率40%、多い若しくは平年並みの確率30%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 08/26～09/25	10 (低い)   10 (平年並)   80 (高い)
		1週目 08/26～09/01	10 (低い)   10 (平年並)   80 (高い)
		2週目 09/02～09/08	10 (低い)   10 (平年並)   80 (高い)
		3～4週目 09/09～09/22	10 (低い)   30 (平年並)   60 (高い)
降水量	東北地方	向こう1か月 08/26～09/25	30 (低い)   30 (平年並)   40 (高い)
日照時間	東北地方	向こう1か月 08/26～09/25	40 (低い)   30 (平年並)   30 (高い)

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

## 2 生育状況

【宮城県古川農業試験場 作況試験 8月10日調査】

### ① 5月25日播種

- ・タンレイの開花は、平年より6日早い7月18日であった。平年と比較して主茎長は長く、主茎節数は多く、分枝数はやや多く、総節数は平年並みであった。
- ・ミヤギシロメの開花は、平年より4日早い7月27日であった。平年と比較して主茎長は長く、主茎節数はやや多く、分枝数はやや少なく、総節数は多かった。

### ② 6月15日播種（ミヤギシロメ）

- ・開花は、前年より3日早い8月4日であった。前年と比較して主茎長は長く、主茎節数はやや多く、分枝数は前年並みで、総節数は多かった。

### ③ 7月5日播種（タンレイ）

- ・主茎長及び主茎節数は平年を上回り、分枝数は平年よりやや多く、総節数は平年より多かった。

播種期	品種名	開花期（月/日）			主茎長(cm)		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	7/18	7日早い	6日早い	98	+20	+20
播種	ミヤギシロメ	7/27	5日早い	4日早い	132	+17	+24
6/15播種	ミヤギシロメ	8/4	3日早い	-	109	+21	-
7/5播種	タンレイ	-	-	-	62	+33	+19

播種期	品種名	主茎節数（節/本）			分枝数（本/本）			総節数（節/本）		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	17.5	+0.9	+1.4	5.1	+1.4	+0.8	43	0	0
播種	ミヤギシロメ	18.5	+1.4	+0.7	3.7	+0.2	-0.5	52	+7	+5
6/15播種	ミヤギシロメ	17.3	+1.3	-	2.8	0.0	-	35	+7	-
7/5播種	タンレイ	11.3	+3.7	+2.0	1.1	+1.1	+0.3	15	+7	+3

注1) 平年差は過去5か年（H30～R4）の平均値との差

注2) 栽植密度は、条間75cm×株間20cmとした（1株2粒播種）

注3) 6/15播種のミヤギシロメはR3年から調査を開始したので、平年値は無い。



【5/25播種 タンレイ】



【5/25播種 ミヤギシロメ】



【7/5播種 タンレイ】

## 3 今後の管理

### 1 干害対策

- ・本年は高温の影響で、開花期が平年より早まっている。
- ・生育中期は、開花までの生育量の3～4倍の生育量になるため、養水分を大量に必要とする。また、開花終期以降の乾燥は百粒重の低下をもたらす、減収の要因になる。
- ・晴天が1週間以上続く場合は、畝間かん水により水分を補給する。排水溝や畦間内に土壌表面に染み出す程度まで通水すれば十分である。

2 病害虫防除【宮城県病害虫防除所 ホームページ及び発生予報第9号（8/28発行）より】

◆大豆病害虫の同時防除は、下図を参考にする。病害虫の発生予報は、以下のとおり。

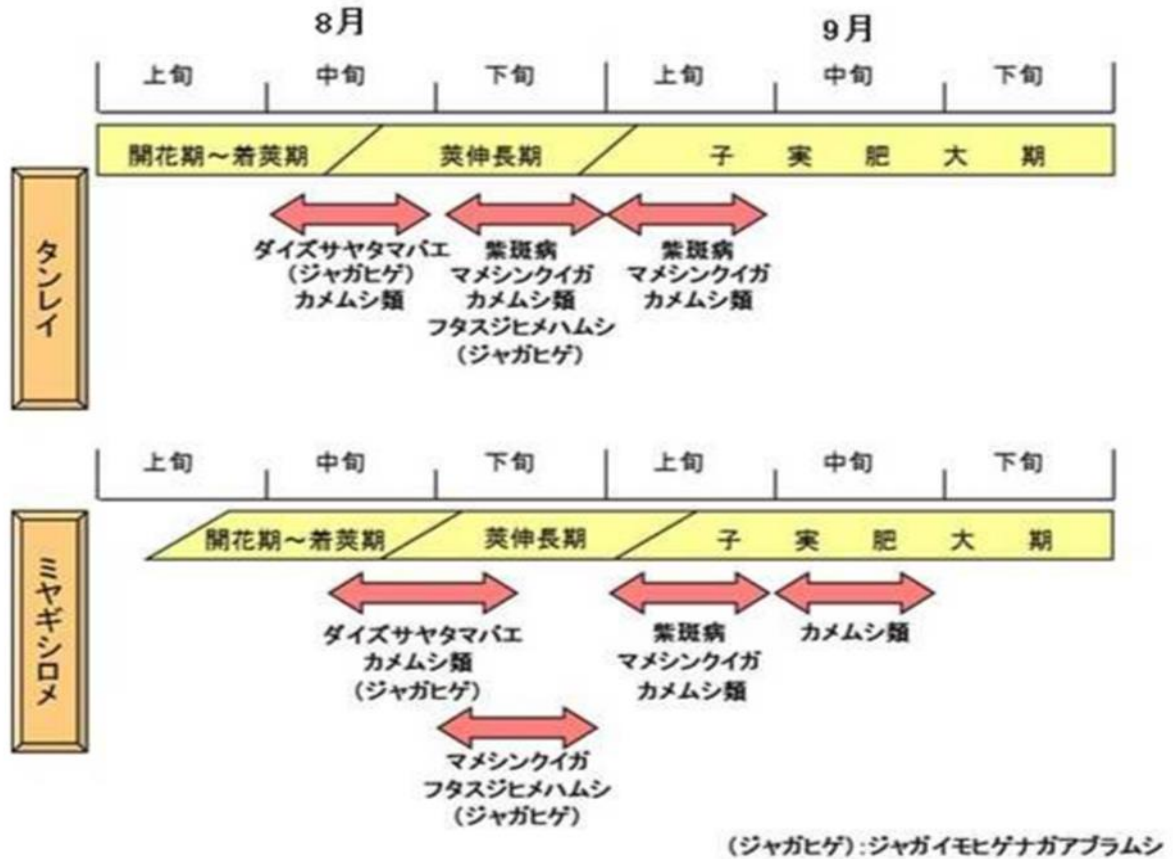


図1 大豆病害虫の同時防除体系図

※ジャガイモヒゲナガアブラムシは密度が高い場合に単独防除を実施する。

※マメシクイガ、フタスジヒメハムシは品種が異なっても発生時期は変わらない。

(1) 紫斑病

- ・ 予報では発生量は、「平年並み」となっている。
- ・ 大豆の生育ステージをよく確認し、開花期の20～40日後に1～2回薬剤を散布する（大豆作情報第2号参照）。
- ・ アゾキシストロビン（アミスター）に対する感受性低下菌の発生が確認されている。薬剤の効力低下が懸念される場合は、他の系統の薬剤に切り替える。

(2) アブラムシ類（ジャガイモヒゲナガアブラムシ）

- ・ 予報では発生量は「少」となっている。しかし、例年は8月下旬～9月上旬に密度がピークに達するので、ほ場を見回り、多発した場合は防除を実施する。



【ジャガイモヒゲナガアブラムシ】



【多発時の食害痕（黄変部分）】

(3) フタスジヒメハムシ

- ・ 予報では発生量は、「やや少」となっている。
- ・ 第2世代成虫の発生盛期（平年：8月下旬～9月上旬）に薬剤を散布する。



【成虫】



【莢の食害痕】



【被害粒】

(4) マメシンクイガ

- ・ 予報では発生量は、「やや少」となっている。
- ・ 大豆を4年以上連作すると、被害が大幅に増加する（大豆作情報第2号参照）。
- ・ 発蛾最盛期とふ化盛期（8月下旬とその7～10日後の9月上旬）にかけて、1～2回薬剤を散布する。



【被害粒】

(5) ハダニ類

- ・ 広域で発生が確認され、寄生頭数の多いほ場も複数みられる。
- ・ ほ場をよく観察し、必要に応じて薬剤を散布する。

(6) チョウ目害虫

- ・ 広域で発生が確認されている。主要種は「オオタバコガ」である。
- ・ 高温年には、まれに大発生して葉が食害されることがあるので、注意が必要である。

3 雑草対策

- ・ タデ類、シロザ、アメリカセンダングサ等の雑草が収穫時に残っていると、汚粒の原因になる。非選択性除草剤の畝間散布や手取りを行い、ほ場に種子を残さないようにする。